八十八歳の誕生日を迎えて

田村　眞生子

今年六月七日、私は八十八歳の誕生日を迎えた。この日は朝からヘルスケアや入居者の会がお祝いに来て下さり、甥や姪、友人達の電話やプレゼント到来など大忙しだった。中でも嬉しかったお客は、田村明研究会の人達が、この七月、横浜で開かれる国際都市計画史学会に、田村明のことを発表する論文が非常に高く評価され、全員参加の最初のセッションに取り上げられることなど、報告に来てくれたことだった。

もう一つは、実家の祖父、齋藤宗次郎が、恩師、内村鑑三先生の生涯最後の五年間のことを記した「聴講五年」が、この夏、教文館から出版されることである。京都の義弟、児玉実英氏が凡て面倒をみてくれたが、祖父母や父母と娘五人の中、四人とも御許に帰った今、一人残った四女の私が監修、「まえがき」と、財政面の大半を受持たせていただき、いささか御恩返しが出来たかと、ほっとした思いである。

顧みれば、八十八年も、なんと長く生をいただいたことか。内村先生の信仰による家庭に生れ育ち、同じ無教会の信仰に生きる明と結婚して共に歩んだ幸せ、感謝でいっぱいである。ただ、結婚直後、私の思わぬ病気で子供を持つことが出来なかった苦悩、申し訳なさは癒されることは無いが、今、この恵まれた地で、内村先生の「仰瞻」を胸に、俳句やコーラスに励みつつ、静かに残りの日を歩ませていただきたいと願っている。

「仰瞻」（ぎょうせん）…キリストを信じ、迷いをすてて神を見上げよ

田村眞生子

立春の朝日大島頂上(いただき)に

前向きに生きむと決めぬ春立つ日

鷽(うそ)どりら、さくらの花芽落すなよ

朝焼けや三声のこして鵤翔つ

遠き日や連翹くぐるかくれんぼ

杉並、成宗の庭を懐かしみて

赤、白、ピンク、父母賞(ちちははしょう)でしはなみづき

異人館訪へばミモザの真っ盛り

亡き夫の友より賜ふ新茶かな

六月七日八十八歳の誕生日を迎えて

梅雨晴れてただ「仰瞻(ぎょうせん)」を祈るのみ

田村　真生子

雷一閃海に弾(はじ)ける夜明け前

台風一過大島の紺いや増しぬ

真白なる海霧(じり)より顕(あ)るる三原山

晴ればれと芒野ひかる野分あと

一夜にて地を覆ふ桜紅葉かな

ふくふくと金木犀の香る朝

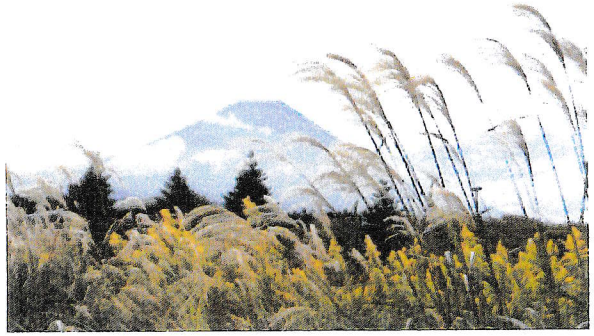
園児らの明るき声に金木犀

南伊豆、天神原植物園にて

藤袴アサギマダラに彩られ

冬晴れや海はるかなる三宅島

はればれと見上ぐる富士の初化粧



朝霧高原の芒

浜辺の歌

田村　眞生子

昨日、ヘルスケアのコーラスで「浜辺の歌」を久しぶりに歌ったら、急に新婚旅行のことを思い出した。今から五十七年前の三月、東京で結婚式を挙げた私達の新婚旅行先は、当時流行っていた九州旅行だった。宮崎、鹿児島から南端の指宿の宿に泊まった時、暮れてゆく浜辺をはだしになって、手をとり合って歌いながら歩いたのが「浜辺の歌」だった。私はアルト、二重唱で…。

結婚生活五十年、ほんとうにたくさんのことがあった。夫は旅行好きだったし、都市プランナーという仕事上、外国だけでも百三十国以上歩いている。私も一緒に歩いた楽しい想い出もたくさんあるが、御巣鷹山の事故以来、一人は残らねばという思いから、無事を祈りつつ帰りを待つことが多くなった。あの時ああして上げれば、とか、この事をもっと話し合えばよかったのにとか、後悔や申し訳ない気持で心が折れそうになることもあるが、今はひとつ乗り越えて、廻りの方々にできるだけ明るい温かな心で接し、感謝の気持ちをもって遺された日々を生かしていただきたいと願っている。亡くなる少し前、食堂で朝食後、「僕たちはこの中で一番仲の好い夫婦だね。」と言ってくれた言葉が、今、私をつよく支えてくれている。

（二〇一七・十一）

「あけび」二九号

田村眞生子

―田村鑑三の「聴講五年」教文館より出版

1. 秋澄むや 祖父の復刻完成す

―祖父 斎藤宗次郎

2. つゆけしや 聖言(みことば)のまま 生きし人

3. 秋の空仰げば会へむ逝きし人

―姪・渡辺寿雄の娘、美矢子、英国留学中より来訪

4. 苟薬のごとく笑む娘(こ)よ愛(いと)ほしや

5. 満月に煌めく波間 舟一艘

6. 満月(まんげつ)下 煌き果てぬ 波模様

7. 颱風に 撓(しな)ふガラス戸 掌で耐へぬ

8. 暴風に はしゃぐや庭の 青芒

9. 黒土に ねむの実はぜて 冬はじめ

10. 大夕焼 祈りの色となりにけり

コクヨ ケ-70 40×20